
world

tanuki

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Word

【Z-コード】

Z2731D

【作者名】

tanuki

【あらすじ】

異世界のものがたり。世界と世界には格差があります。どっちがどっちかは読んでから

「学園長、お悩みになつていた例の件のことですが……」広めの応接間で、すつとスーツを着こなしてゐる20代半ばほどの女性が眼鏡を人差し指で押し上げてから右手に持つた黒いノートに挟まつた報告書を読み上げる。

「ふうむ……」

女性とは対局に、だらりと崩した姿勢で高級そうな椅子に腰掛けた老人が髪を撫でながら声を漏らした。

「『あちら』の役員からの報告書によりますと、こちらで1番、2番、3番の者たちを連れて来いといつております」

「1番、2番、3番……か。簡単にいうもののじやのう。じやがこれを請けないなどといつたら、たちまちこの学園も潰されてしまつじやうづし……」

まいつたのうと今まで刻んできた皺をさらに深くしながら、老人は頭を自分の開いた膝の間に埋めた。

「学園長、問題の本人たちはどういつてるんじょつか？」

「それなんじやが……」

秘書の言葉に地面に額を当てそつになつっていた老人は、また体制をもちなおす。

「3番はいいといつておるんじやが、2番、1番がのう……」

「2番も?なぜ彼女まで渋つているんですか?」

「それが、自分が話せる相手は1番と3番だけだから1、3番両方が行かなければいかないそうじや」

「……」

あ、と思いついたかのように秘書は息を吐きながら血のノートに頭を埋めた。

「・・・「ホン、では1番が渋る理由は?」

秘書はしばらく顔面でノートの冷たい紙質を味わつたあと、元の締

まつた表情に切り替えて頭を上げた。

「なにやら・・・その・・・・・・ま、魔法が怖いらしいんじゃ」

老人がいいにくそうにほそつといふと秘書は思わず噴きだした。

「魔法が・・・くつ！怖い・・・くつくつくくくくくく

老人は、両肩を震わせながらまたノートに顔を埋めた秘書を見ながらため息を一つつく。

「まあ、そう笑つてやるな」

「・・・ですが・・・・・つつくつく！」

秘書がノートとお友達になつて5分ぐらいたつてから、ぐわつと秘書が頭を上げ顔を切り替えた。

「はあ、はあ、はあ・・・・・「ホン。ですが、学園長、これはもう断るなどは出来ない」とです。なぜなら、私たちの世界は・・・

「わかつておるよ・・・・・」

老人は諦めた風に呟いたあと・・・・さつきから机の上に広げてある書類に判を押した。

はじめての世界は、思いのほか綺麗だった。

「ふう・・・・」

「ここに来て何回目のため息か・・・。正^{せい}は視界いっぱいに広がる自然の縁を見つめながら自らの不幸を嘆く息を吐く。

「やつてられんな・・・・」

自然は好きだつたし、いつも大人になつたら田舎で暮らそつなどと考へてた。だが、しかし！

「こんな意味のわからん世界など一生来たくはなかつた！」

話では聞いていた。ここに来るまえも再度説明された。この異世界は昔、『こちら』の世界に勝つた戦勝国だ。単位が世界なのに何故『国』かというと、文字通りこちらの世界は一つの国なのだ。

想像すら仕切れないほど広大な世界。それを争うことなく、一人の王が治めている（一人といつても補佐をする人など山のよつにいると思ひが）。

平和な国だ。誰に毒づくことも無く心中に吐き捨てた。『こちら』いや・・・今では『あちら』の世界。つまり魔法の無い世界。そこでは戦争などしそつちゅう起つていていたからだ。一番の原因はテロ。テロといつても単発で終わるものなどではない。テロ組織は一つの国ほどの規模なのだ。つまりは全員が全員危険思想。国民全員が戦士といふいかれた国が存在してしまつたのだ。

テロ組織の規模が大きくなり始めたとき、世界は『こちら』へSOSを送つたが、『そちらの世界のことはこちらには関係ない』とノータッチ。自分らを助けるのは自分らしかいない。そんな簡単なことに気がついたときは、時すでに遅し。テロ組織は自分らと同等程度の力を持つていた。その手遅れに出来た学校。それが正の所属している学校だった。

『学園』

名前などは特に決めず、とりあえず戦える者を育成するために出来た遅すぎる救世主学園。頻繁に起こっていた戦争の孤児達を片つ端から入れて、昔からの武家の子ども達を学園長推薦という形で入学させ、5歳～18歳までという長い長い本来ならばありえない過程のまさに救世主生産学園を作りだしたわけである。

ところがだ・・・、10年ほどたち、戦士（救世主）量産がうまく回り出しあじめたとき、すでに期待もしていたなかつた異世界からの接触があつたのである。なんと異世界の王自信がこちらの世界にやってきたのだ。

向こうの王の話によると、『そちらの世界も段々と落ち着いてきた。ここにいらでもつと交流を図るのではないか』という案だった。だが、当時の国会は驚いた。交流などとは真っ赤でたらめ一つまりはこちらの世界の戦力確認だった。異世界の王の案は『100年に一度。学園の1番、2番、3番の実力者たちをこちらに留学生として迎えたい。だが、こちらは留学生は出さない。そしてこちらの世界で起きた事故等については一切保障できない』などという馬鹿馬鹿しく下手すれば留学生全員が生け贅にもされかねないものだった。当然、国会はこれを拒否。こんなの承諾できるはずがない！異世界の王にその旨を告げると、王が豹変した。『今まで負けた国を植民地にもせずに放つておいた！それなのに・・・』どう考へてもめちゃくちゃのことをいい出し、いきなり魔法を使いはじめたのだ。さすが異世界全てを統べる王というべきか。空が割れるほどの雷を天より落とし、一つの街を消し去ったのだ。そして王はいった。『本当はこんなことはしたくはない。だが、もしも承諾できないというのなら1日！』と一つの街を消すと。そして無理やり今から500年前にされた契約は留学生制度などという実に現代らしい呼び名に変わり、今でも残っているのだ。

「とりあえず・・・寮にでも向かわなきゃ・・・」

元の世界の先生の話で荷物がすでに届いている可能性もあるらしいとこつっていたのを思い出し、『ついに制服のポケットに入つて

いた地図を広げて目的地に足を向けた。

どこまでも先の見える道

新しいこの世界には自然が多かった。

魔法なんてのが無かつたら住みたいくらいなんだが。などと思わず軽く漏らしてしまおうほどにこの世界は美しかつた。ひまわりに似た花が道を作るかのように両端に並び、先へ先へと導いてくれる。空に移る遠くの山々は元の世界の2倍ほどの大きさで山頂を見ようとすると真上を仰ぎ見るような形になつた。

正が新しい世界の自然を満喫していると、茂みが揺れた。

アートの基礎知識

「なんだ・・・うわ」

「アシーチー、俺つかれ

七
卷之三

大声を出しながら彫出したのは正の二下今回同じく留学生は
選ばれた棍だった。

「いやーー、やっぱ」らち来て正解だつたすね!。向こうだつたら先輩を驚かすなんて出来なか・・・・あれ先輩?」

な
・
・
・
・
・
！
！

・・・嫌だなあ！・・・冗談ですよ。冗談！この世界に来て
緊張をしてる先輩の肩の力を抜けせるためのつ！」

「力を抜かせてやる……」

「ひ・・・ひえつ！・・・・・つてあれ、せんぱい。獲物持つて
ないじゃないですかあ～」

さつきまでの苦えよつぱぢにいったのか。一転、元の軽い調子に戻る。

「くう・・・そうだつた・・・荷物と一緒に部屋に送つたんだつた・

・・といつことはおまえもそうだろ？

「YESTERDAY! しつかし、何が転送装置なんすかねえ・・・・・真っ裸じやないと転送出来ないなんて・・・・・あ、そういうえばどつすか！？俺の新制服姿！」

いいながら制服の襟元を持ちながらぐるっとまわってみせる。

今二人が着ている制服はこれから一人が留学中に通う学校のものだ。白を基調とした上下のブレザー。そんな奇抜なものでもなく、そこまで地味でもないセンス。

「ぐるっと回るのは女のポーズだら・・・・・男がやつても気色悪いだけだ」

「へーへー、そうですかー。でも、先輩の制服・・・・・急に棍の目が壊れ物を扱うような目に変わる。

「つるつせえ！ そんな目で見るな！」

棍が哀れみの目で見るのも無理はなく、棍の身長が175以上あるのに対しても正は背伸びして、160あるかないかだ。つまりズボンは裾折り、上着は腕巻き、胴はダボダボである。

「先輩。牛乳飲んだほうがいいんじやないんすか？」

「飲んでるよ！ 每朝1リットル！」

「1リットル・・・・・飲みすぎつすよ・・・・骨が硬くなりすぎて背が逆に伸びなくなりますよ？」

「てめつ！ てめえが前にでかくなるためには毎朝1リットルついてたんだろ！」

「えへ、そんなはず〜」

そんな調子でからかい合っていると、いつの間にか比較的高い木々のより高く先に大きな建物が見えてくる。

「うおつ！ あれっすか！」

「・・・・・多分な」

興奮する棍の問いに正は地図を見ながら答えた。

「綺麗だな・・・・・」

思わず息を呑むほどの神秘的な建物。高く白い建物の中心に水のよ

うなものの流れるクリアな部分から泡状のモノが上へ上へと流れている。

「あれって、もしかして魔力ですかね？」

「だよ」

「え？ うおおあああ！」

梶の感嘆による答える求めていない問いに答えたのが一人。梶を驚かした声の持ち主は薰。黒髪、黒目の大和撫子といった感じの女性である。そして今回留学生に選ばれた一人でもある。

「薰先輩居たんですか！？」

「いた」

「もしかして正先輩は気がついてた？」

「ああ」

「うおおおい・・・いつてくださいよー！」

「おまえも俺の気持ちがわかつただろ。薰先輩グッジョブ！」

正が親指を立てると薰も頬を染めながら親指を立てた。

正が先輩といつていふことから気がつくと思つが、薰は正の一つ上の先輩である。そして得意な獲物は・・・。

「正君に誉められると嬉しい」

にっこり笑う太陽スマーリル・・・ではなく、背中に背負つて黒髪大和撫子美女には似合わないゴツいバックである。

「二人の荷物はあそこ」

薰が指さす方向を見ると、寮の建物の玄関横にいくつかのバックが積んであつた。

「なんだよ、部屋まで持つてつてくれねえのかよ」

梶が不満を露わにしていると

「何が部屋までだ！ さつさと寮の前から片付けろ！」

恐らく教師であろう、向こうの世界では有り得ない真っ赤なロングを手で後ろに流しながら般若の顔をした女が立つていた。

「んだと・・・てめえ？」

梶がいきなり切れながら荷物の黒いバックから獲物を取り出そうと

すると、正がその頭を叩いた。

「なにすんすか！」

正は梶の胸倉を掴み耳元で小声で話し出す。

「いきなり面倒起こすな、俺はこの留学の目標を『穩便に』って決めてるんだから」「

「だつて・・・むかつきません？？？あのツラ。ありやあ自分はいつでもナンバーワンって思つてる顔ですよ？」

梶もチラリと赤毛の女を見ながら小声で話す。

「んなもん知るかよ！ナンバーワンでもオンリーワンでもホールイーワンでもいいからわっさと荷物持つて俺たちの部屋行くぞ」「

「・・・はーい。・・・先輩」

「なんだ？」

「今のギャク微妙

「殺すぞ？」

「すんませーん」

こうして何気に後ろから付いてきている薰も引き連れ寮の中に入つて行つた。

「ふいー、着きましたねー」

「あー」

寮の中にいたおばさんに色々と親切に教えてもらい、なんとか自らの部屋にたどり着いた。

「それにしても・・・」

「ん?」

「なんで女

の子と同室じやないんすか!!」

「そりやあ、こっちでの俺たちの扱い、寮生の目線でわかつただろう?」

ここに来るまでに何人かすれ違ったが、全員無視か侮蔑の視線のどちらかだった。

「事務員の手違いで可愛い女の子と同室!-そして起こるハプニング!少し気まずくなつた2人は学校でようやく別れられると思つたら、「え、同じクラスなの?」そして2人はいつしか互いを意識していくようになり!ついに・・・過ちが起こってしまう・・・「私、あなたのことが・・・」「僕もさ・・キラーン!-(歯の輝く音)」2人の距離がだんだんと縮まっていき・・・ついに・・・」「どかーん!」

「ぶげはあつ!...」

棍の妄想がクライマックスに突入し始めたとき、正の持つ鞘に納まつた刀が鞘ごと頭に打ちぬく。

「ぎやひいイイイイイイってええええええええ!」

「いつまでのふざけた妄想してんじやねえよ。ホラ、おまえの荷物しまえ」

正がのた打ち回りエイリアンの子どものような叫び声を上げている棍は見ず、足元のバックやらダンボールやらを蹴り飛ばす。

「辞めて！中がこぼれたら大変だからっ！おかんにも見せたことないのにいいいい！」

やけに厳重にガムテープが貼つてあるダンボールを蹴飛ばすと急に機敏に動き、それらを自分のベットの上に避難させた。

「つたく・・・・・、んじやもつ俺は寝るからな！静かにしろよ？」

「そういう、こっちの世界は昼でも向こうは夜でしたもんねー・・・・・つてあれ先輩？もう寝てるー・?」

「すーっ」

梶が正の脣に約一センチのところに聞き耳を立てる。

「よつしゃああああああ！もう寝やが・・・」ぼしつー・

「静かにしろ眠れねえだろ・・・・・・くかー・・・・・」

「寝てるんじやないっすか・・・・・」

梶はまた鞄で叩かれた痛む頭を抑えながらとりあえず大きな声は出さないように誓つた。

「んつふつふつふ・。やっぱ異世界に来てナンパしないやつ何てクズなわけよー・・・・・でもなー、君はちょっと女の子つていうか・・・・メス？」

「ガルルルルルル！」

「つおい！クマがそんなに牙剥き出しな声出すんじやねえよー・

梶は目の前の2メートルほどのクマに対してもしづつ後ずさる。こんなことなら獲物を持ってくるんだつたなーと思うが手遅れだ。梶自身、学園のカリキュラムで普通以上に無手の戦いは学んだがクマが相手では話は別だ。といつかそもそも寮のおばさんが教えてくれた学校のへの道がアバウトすぎた。方位磁石をやるから森を北に突つ切れと。よく考えれば野生のモンスターやらを倒すために魔法を磨き上げるこの世界で森に突つ込むなど森のクマをんばつちこーいな感じだつたに違いない。

死の淵にあると人間頭がよく回るなあーなどと思い右手に持つ方位磁石の示す北を睨みつけると

急に木々がざわめきだし、梶とクマを襲い出した！

「なつ、なつ、なんやねえええええええん

初めて魔法をお目にかかる棍を驚くのも無理はない。いきなり木々の枝が伸びクマをがんじがらめにし始めたのだ。

卷之三

すでに身動きができなくなっているクマに棍が同情しあじめる。

思ふ事の如きを聞かれて

第三回

卷之三

卷之二

גָּדוֹלָה מִתְּפִלָּה

林の井の跡にアリの巣がある。

「あんたみたいな馬鹿でかい人間がいるわナ……」

「一九四〇年」

「でも…

「いいから姿をみせろつ！」

卷之三

櫛のまぐつにじれに思わず声を張り上げた。まあ、本来短気の彼が姿も見えないやつに優位に立たれているのが気に食わなかつたのもしょうがないだろ？

「あんた本当に人間よね？」

そういうながら、林の影から姿を現したのは女性だった。

はじめに見えたのは流れる髪。それももとの世界で見れるはずのない純粹な赤の毛。

「結婚してください」
そして次に彼女の火を連想させる瞳。それを見たとき棍は

「<?」

「ウオッホン！いや・・・失礼。お名前は？」

「み、ミラスだけど……な、なによ…?」

急に棍がミラスの両手を包み込むように上から握る。

「僕は生まれて初めてあなたのよろしいお嬢様を見ました」

「え?」

「僕のこの胸にはいま電撃が走っています!」この電撃はいつたい何なのでしょう……なんなのでしょう?恐らく愛でしょう!」

「えつ?えつ?えつ?」

いきなり始まつた棍の口説き文句(?)にただ呆然とする少女。

「ああつ!これは運命!恐らく神はあなたと出会わせるために僕をこの世界へと送つたのですね!」

「ちよつと…あんたさつきから何いってんのよ!」

「ああつ!怒つた顔も素晴らしい!その膨れ上がつた頬に愛による口付けを……」

そういう、一人つつとつとした表情で少女の両肩を掴み……

「きやああああああああああ!」

頬にキスされる寸前で右拳が棍の顔にめりこむ。

「ふんぬばあつ!」

「なつなつなつなつなに考えてるのよー!この変態グリズリー男つ!」

!」

そういうてスタコラサッサと森の奥に消えていつてしまった。

「いってえええええ……ちつきじょうう……あのアマ……」

拒否されたとたんにこれ。まさに男の肩。

「ふわあ～あ・・・・・」

結構よく寝たななどと思ひながら正は頭を擦る。

「あつの・・・・アマ・・・・・」

隣のベッドを見ると棍が布団から腹を出しながら頬に赤い紅葉跡をつけて寝言をいつていた。

「こいつ何かやらかしたんじゃないだろ？　な・・・・・

はい！その通りです！

なんて答える人もいなく、ととりあえず蹴つ飛ばして起ひじてから洗面所に顔を洗いに行つた。

「ねつみい～っすよ・・・・・」

頭がまだ覚醒していないのか、さつきから通路の両壁に結構な音で頭をぶつけながら跳ね返るようにな進む棍。

「おら、しゃんとしろ。薰先輩もう来てるぞ」

頭が傾いている方向により加速をつけて押すと、壁に棍がめり込んだ。

「あれ？真つ暗？つて抜けねつ！先輩！誰かが真つ暗な世界で俺の頭を必死に固定してくるんすけど！――」

んな気味悪いことするやついるか馬鹿。そんなことを思つが、2割がた自分のせいかと思ひなおし、少し心のなかで反省したあと薰に挨拶をした。

「え？助けないんすか！？ちよつ・・・・ふん！あつ抜けた！」

「薰先輩、おはよう

「うん、おはよう

につこり微笑むこの太陽は上に上がつてゐのよりも眩しかつた。

「薰先輩おはよーっす！」

「おはよう

「・・・」

「ど、どつしたの？」

薰を見ながらうんうんと頷く梶を見て、少し照れたように俯きながら薰が聞いた。

「いえ、やっぱり薰先輩が一番だと思いましてね～」

「おまえ、やっぱり昨日何かやつたのか・・・」

能天気に笑う梶を横目に見ながら正は思わず頭を抑えた。

「えつへつへつへつへ」

「はー・・・・」

「・・・・？」

能天気に笑う梶と、痛そうに頭を抑える正と、事態がいまいち掴めずにクルクルと二人の顔色をつかがう薰と、一人一人の心中は違うと思うが、全員がこれから始まる生活に何らかの感慨を抱いているのは確かだった。

「やあやあやあやー君たちが100年に一度の選ばれた者たちだね！」

明らかにその辺の少女たちは一線を置く、成熟した魅力を持つ女性がこの世界では逆に珍しい黒髪と、その髪と同じくらい深い瞳で留学生達を迎えた。

「先輩、なんか俺この人から悪寒を感じるんすけど・・・」

「奇遇だな・・・俺もおまえの母親と同じ匂いを感じるんだが・・・」

・

そのまま正の額から冷や汗が頬を伝う。

「やあーだな！そんなに身構えないでくれたまえよー別に・・・とつて食うわけでもあるまいし・・・ね？」

キラリと黒い瞳が輝くのを見逃すメンバーではなかつた。

「まあ、と・り・あ・え・ず！学園長室へ行きましょー！いろいろ話す事項決まつてるしねー・・・というわけで！そのグリズリーみたいな君ー！そうつ君だよー！はい、この後で配る教材もつてきてね

！」

まるで歌つよう躍り、地面に小山が出来るほど積んである教材の束に指をさしてそのまま前に歩き出す。

「なんで俺！？先輩たち・・・って置いていかんといですでに前方の女性の数歩後ろを歩いている先輩がた。」

「がんばれグリズリー！」

「クマさんよかつたですね」

「いやああああああああ！ついでいうか昨日クマひどい田あつてたの見たんすけどおおおおおおおおおお！」

「ウォッホン、では君たち。これからわじがこの世界の注意事項などを説明するのでよ～く聞くのじや」

「いや、なんで口調変わってるんすか・・・？」

「え？学園長つて本来こうじゅじゅべり方をしなきゃダメなんじやないの？」

キヨトンとした顔でうらを見返す先ほどの女性。

「んなわけないでしょ・・・」

「なーんだ」

「それよりも・・・さきに一つ聞きたいことがある」

そういうつた正の顔は殺氣がこもるほどに真剣だつた。

「この世界の・・・平均身長はこくつだ！」

「え、え？えーと・・・確か160ぐらいだったと思つけど。やういえば、やこの子すばくおつきこわねー」

「・・・」

田の前の女性が棍のことで話をふつたにも関わらず正は俯いていた。

「・・・」

「えつと・・・へやなつとビビついたの？」

「俺・・・俺・・・この世界に来てよかつたです・・・」

泣いていた。

「ありがとうござります・・・えー・・・えー・・・」

「あ、ごめんなさいね。自己紹介忘れちゃった」

そういうて女性はすつと息を少し吸つてから

「私の名は、ミロ・レ・ミファエル。一応学園長だ。……ところで、どうだつたかね？さつきまでのキャラ！まさに天然可愛い系学園長の風味を出していなかつたかい？いや、でも君がいきなり泣き出せいで少しこつちのキャラが薄くなつてしまつたね！だが天然可愛い系学園長もなかなかいけてなかつたかい？惚れたかい！？しかし残念、私たちは教師と生徒……あれ、学園長つて教師のうちに入るんだつたつけ？アツハツハツハ！」

急に口調を変え、豪快に笑いだす学園長ミファエル。その様子を見て少し予想でもしていたかのよう正がため息をついたあと、質問した。

「えーと……、失礼ですが俺たちは名前が一つ以上ある人に対しどう呼べばいいのかわかりません……どこを呼べば？」

その問いにミファエルはちょっととしまつたという顔をしたあと「そう……だつたな。うむ、特に親しくない場合は一番上、適度に親しみを込めてだと一番下。真ん中は主にその家系の血筋などを現しているのであまり呼び名で使うことは少ない。ちなみに私の場合はミファエル先生だ」

そういうてにかつと屈託のない表情でミファエルは笑つた。

「本来なら次は君らの自己紹介なのだが、あとで……いいかな？どうも決められた話すことはさつたといつてしまわないとかなわない性質なんだ」

その言葉に3人が「クン頷く。

「コホン、では君らにはこれから注意事項をいくつか話す

「まず一つ目！森には入らないこと！」

ビクンと棍の肩が跳ねた。

「理由は森には君たちが知らない生物が多すぎる。それに君たちはこの世界の者がなぜ魔法なんて物騒なものを習つか知つていいかね？それは簡単、君らの世界にある義務教育ほどにこの世界にとつて

戦うというのはありふれている。だからこそ足し算やら引き算やらを覚えるのと同じように身の守り方、敵の倒し方を知る。つまり自然こそがいつでも最大の敵になるからこそだ

「次、二つ目！女子生徒と恋仲にならないこと！」「ビクン！」

「これは当然。そもそもこれが昔の戦争の理由だ。魔力のあるものと無いものを分けた戦い。もしも女の子一人でも孕ませたら……」「……たら？」

黙るミファエルに棍が恐る恐るたずねる。

「馬3頭に玉と玉と竿を結ばせハつ裂きだ」「ひいいいいいいいい！」

棍は両手で股間を押さえ、身動き一つしなくなってしまった。ミファエルはそれを見て軽く笑つたあと説明を続ける。

「三つ！……これはなるべくなんだが。決闘は控える」と一えー決闘とは……決闘とは……えー……

「確かに双方の合意のある戦いは殺人の罪にはならないでしたっけ」ミファエルが言いにくそう迷つていると正が変わりに答えた。

「あ、ああ……そうだ」

「で、もう終わりですか？注意事項とやらは

「ああ、まあ……」

それを聞き、正は棍が持つてきた教材の紐を解き自分の学年のものをカバンに入れはじめた。

「あつ、そういうえば先生。俺らまだ留学期間とか聞いてないんすけど」

当然すぎる質問。だが何故か元の世界の誰も言つてくれなかつたこと。荷物をカバンに入れていた正も振り向き、棍の質問の答えを待つ。

「こんだけっ！」

そういうつてミファエルが人差し指を立てた。

「一ヶ月。なかなかに短いなあ～」

梶がそうこうとミツアエルは首を振る。

「えつ！一週間とか！んだよ～、ただの旅行じゃねえか！」

またブルブルと首を振る。

「明日帰るんっすか！？」

ブルブル。

「えーと・・・じゃあ、まさかー・・・一年とか？」

「クン。

「冗談・・・ですよね？」

ブルブル。

「ちょっとー」

さすがにこれには正も黙つてられない。

「薰先輩はどうなるんですか！」

「えーっと、こっちは昨日に始業式だったから・・・正確には薰ちゃんの卒業までつて」と

「ふえ？」

いつの間にか異世界で卒業式を挙げる破田になつていてる薰も驚きを隠せない。

「そんで、おまえたけもこいつの報告しだいで卒業だつて～。」「はあつー？」

そんなの聞いたことがない！あんな特殊な学園で飛び級卒業！？突然こつちで聞かされた事実に正は眩暈がした。

「俺まだ一年なのにつ！」

梶が一年といつても、すでに結構期間は経つていた。だがこつちの学園は始まつたばかりであり、もとの世界と結構ずれがあるようだ。「それでも、おまえらのこの学園長もなかなか勇気あるな～。危険なこの世界を卒業試験にしちゃうなんて」

そういうつてほぼ同じポーズでうなだれている梶と正の肩にポンと両手を乗せ

「まあともかく・・・一年間みりしくー！」

「はあ・・・」

「はあ
？・・・
」

当人たちを置いてきぼりにしつつ、最悪の一年がはじまりつつあつた。

「ちっきしょー、ヤケヤガつて・・・！」

1年の滞在が決まったとたん急に荒れはじめた棍。

手に持つている棒状の黒のカバンで壁がガスガスと叩いている。だが棍がこんなに荒れるのも仕方が無いことで・・・なんと棍には可愛い可愛い妹がいるのだ。それも通つてているのは普通の学園の。そんな目に入れても痛くないほどの妹を元の世界に残しているのだ。勿論、こっちに出てくるときに同じ学園のそれなりの奴らに護衛を頼んだ。だけど、それでも安心できない・・・もしも護衛を頼んだやつらが可愛すぎる妹の魅力にまけ、あんなことや、そんなこと、ましてやあんな・・・・・・！

「いい加減にしろ！」

いい音がして棍の頭が杖で殴られた。

「本来なら貴様のよくな魔力の無いゴミが入れる場所じやないんだ！黙つておとなしくしていろ！」

杖で殴つたのも、怒鳴つているのも初日に見た赤い髪の女だつた。名はファン・ド・レミエ。そう棍がいきなり切れかかつた女性はやはり先生だつたのだ、それも担任。さつきからブツブツとしゃべつている棍の頭を容赦なく杖で打ちつけている。普段の棍なら美人といつとも差し引いてもぶちきれそうだが・・・・・

「タ子・・・タ子・・・・無事で居ろよ・・・・」

頭に痣が出来るほど強く殴られたのにまつたく氣にも留めない。

「ちっ・・・・！ 気味の悪いやつだな」

ちよつと異常な棍の様子を見て、レミエはそれ以上何もしなかつた。

「みんな知つてていると思うが今日から留学生が入る」

普通なら騒ぎそうなものだが、教室の中の生徒は誰一人としてしゃべらなかつた。

「ホラ、入つて来い」

「夕子・・・夕子・・・」

レミエに促されて入ってき

「以前は鬱陶しいのがジヨーのハーフ

ハリがそつこつ一人の生徒がアマ

その詠葉は他人の生徒が笑ひ

おしゃれ ちゃんと勉強していながら、この世界の人間に

レミエが嘲笑気味に「うー」とクラスがざわざわとざわめきだした。

「うわー、マジで名前一個しかないんだって」

「つていうかやけにでかくない?まるでグリズリーみたい」

のかよ」

「嘘、だ、ない。おおの、嘘、ないだ」

レ//Hが空いてる場所を指差すと、その周辺に座っていた生徒たちが『うわ～』といいながら一周りほど移動した。梶はそんな周りの様子を気にすることなく、すた、すた、すた、すた、と。まるで足を引きずり歩くかのように指定された席に着いた。

その後、レミエは新しく入った梶に何の説明もせずにいつものように授業をはじめ、あと少しで終わりそうかな?という時間になつたころ

梶が動いた。

ハ！ヒヤハハハハハハハツ！」

「な、なんだ！？」

急に誰かが馬鹿みたいな声で笑い出したのに対してもHは黒板に向き合つ形から声の発信源を見る。

「『ミ』か・・・へじうした『ミ』、鏡でも見たか？」

そういつた瞬間、棍の異変に戸惑つていた生徒達が少し沸いた。
「いやー 気がついたやつたんすよ、俺。 そうか、最初からこうやれば帰れたんだ~」

ウキウキと歌うように喋り、自分の手持ちのカバンから何かを取り出した。

出てきたのは1メートルほどのただの木棒。

一本。

一本。

一本。

一本目と二本目に金具が着いてる以外になんの変哲のないただの木の棒だった。

「おじおい、『ミ』。なんだきゅつに？ それでお遊戯でもするのか？」

また少し教室が沸く。

だが・・・

普段の恐ろしいほどの短気な棍はそれすら気にせず、カチッ、カチッ、つと棒を繋ぎ合わせていく。そして、最後に出来たのは3メートルほど長い木の棒。

常人では持つことも出来なさそうな木の棒を棍が片手で確かめるようになら、3振った。それを見てさすがに様子がおかしそぎるといつことに気がついたレミエは慌てて自らの杖を構えた。

「この世界のやつら皆殺しにすれば俺もとの世界に帰れんじゃ〜

〜ん

狂気。まさに狂気。

棍の精神はすでに何かを超越していた。

「おー！ 私が許可をする。この『ミ』を攻撃しろ！」

どうせ契約で奴らの命の保障まではされていない。 そう思い『ミ』

は生徒に声をかけた。

「エー、先生まじでやつちやつといいんす・・・」

喋っていた生徒が目の前で消えた。

一人

二人
三人

四人。

そこまで数えて慌ててレミエは自らを棍から距離をとつた。

「なんだ・・・あれは・・・」

さつきまで確かに長い棒を振り回していたはずだったのに・・・今
あいつが持っているのは・・・鞭?

「さ~て、そろそろペース上げるぜえええええ」

木の鞭のスピードが上がる。

見えるのはただのうなりだけ。

暴風に巻き込まれるようにひしやげた生徒たちが飛んでいく。
魔法の詠唱? 出来るわけがない、止まつたら身体をへし折られる。
だが、自分は教師だ。とりあえずこの事態を起こしているやつを仕
留めねば!

そう思い、一歩進んだときすでに身体は10歩分ほど横に飛ばされ
ていた。

悪夢のような状況が5分ほど続いたあと、棍が一人ですべてがなぎ
倒された教室に立っていた。

そこでレミエと目が合つた・・・。

「あれえ?? 初日に見た糞女じやねえか?」

「・・・へつ」

ついわざりまで「ミ扱いをしていたやつが自分を見下している。

「」の「」め・・・」

そういうかけて意識を手放さそうとしたとき、グシャと血の手

の骨の碎ける音を聞いた。

「おいおいおいおい！何勝手な発言して氣絶しようとしてんだよ？つていう昨日もなんかむかついたしな・・・とりあえず拷問フルコースでもやってやつか・・・あつ！右手の骨全部碎いちやつたし！一本ずつやんなきや拷問じやねえってのに・・・」

「井戸端の第一關節」

「ああ、うーん。」

木の棒で

「あつ」

レミーの目の前いる男が悪魔ように見えていたとき、梶の上に人物により影がかかつた。

な？

「え・・・? あれ? せ、せんぱーい・・・いやあ、だつてちよつと
夕子が心配だつたし! 一、ちよつ、ちよつへつて講義を起しき
つたつていうかあ~」

「ちよつとお~?ちよつとお~なあ~、授業中に生徒と先生ぶつと

「ふ、ふーあ、ひよりんがーちうす、ちよちよったみたーな……」

逃げるが勝ち！！」

梶はダッシュで2階毛窓から迷わず飛び降りた。

「てめえ、帰つたら覚えてよお〜。」

正が窓に近寄り、大声を出すと遠くから「すいせいせーん」という声が聞こえてきた。

「つたく・・・」

「で、騒ぎの原因は?」

正がため息をつきながら転がるイスを蹴つ飛ばすと、いつの間にか
クラスのドアの前に立つて『ミフア エル』が正に聞く。

「多分・・・妹が心配だつたんぢゃないんすか?」

「妹? 彼にそんなのがいるのか?」

「ええ・・・あいつの両親が最近死んでからますます溺愛してゐる
ですよ・・・」

「ふうむ・・・そつか」

「えつと・・・罪になります?」

「・・・まあ、いいだろ。そちらへんの事情を無視して急な長期滞
在だつたし、それに・・・死んでなけりや治せる」
学園長はにかつと笑つてみせてから、負傷している者たちをタンカ
で運ぶ回復要員達を指さした。

「えつと・・・俺はまだ授業いけないんすか?」

正は薫と棍とは違い、さつきから『ミフア エル』学園長に
色々な説明を受けていたのだ。

「ああ、まだまだ。さつきのも職務の一つになるんで。セイ先生」

「はあ~、まだ学生なんだけどなあ・・・」

正は本来学生だが、少々この世界の王と面識があり、王たつての希望でこの留学で武術についてだけ先生役に選ばれた(らしい)。とい
うか本人はついつき聞いた)。

「はあ~」

「ため息をつくと魔力が逃げるだ

「こつちの言葉ですか?」

「いや、こま考えた

「は~」

「ミフア エル」

「えつと・・・また学園長室?」

「つむ、私のあとについてくるべし!」

「セイ」

「ん？」

「・・・」

「んん？」

「・・・」

「んんん？」

「・・・」

「先輩、さつきから爽やかな朝の登校に誰も目を合わせてくれないんすけど・・・」

梶がところどころが腫れた痛々しい顔でさつきからぐるんぐるんと辺りを見回していた。

「そりや、昨日あんだけ自分のクラスを壊滅させたんだ、目もあわせたくないだる」

「そりんなもんすかね・・・」

顔もそんだけ腫れてりやなと正は心の中でつけたした。

「あつ、先生」、おはようございまーす」

「ひいいいいいいいいいいいいい」

梶が挨拶したとたん、梶のクラスの担任、レ://Hは叫びながら学校方面に走り去った。

「ちょっと傷つきますね・・・」

「しようがないだろ、拷問フルコース食らわせようとしたんだから」

「未遂ですよ！未遂！あんなに怯えることないと思つんつすけどね・

・・」

梶が最後のほうぶつぶつといつっていたが、正はそんなことには構つてられなかつた。

こいつはいいよなあ、生徒で。俺なんか今日から先生役・・・。

「はあ～」

「ため息つくと魔力も逃げますよ～？つてなんかここにありそな

言葉じやないつすか！？」

「おまえ脳みそ引きずり出すぞ」

「なぜ！？」

「あー、朝つぱらからいきなり先生かよ・・・」

残念なことに今日は武術（本来なら魔法試合）の授業が一限目からである。

「梶のやつ・・・一人だけ不安が消えたからって・・・」

梶は一年の教室のところで「あ、俺もとの世界で学園長に妹のことを頼みましたんでもう心配ナッシングです。・・・というわけで、子猫ちゃんたちカモーーーーン！」といいながら自分のクラスに飛び込んでいった。

「これも全部・・・あのおっさんの・・・」

「止まりなさい！」

「ん？」

なぜか喉元にいつの間にやら刃物が突きつけられている。あー、この世界にも刃物があつたんだな、などと勘違いなことを考える。

「貴様はこの学園の・・・え？」

正は喉元の刃物から離れるように後ろにいる人物に倒れこみ

「まあ、正当防衛だな」

腕で相手の首を抱え、そのまま当然のようにへし折った。

「おっし、んじやお顔をはいけん・・・って人形かよ。なんだこれも魔法か？」

正はそういうながら、人形の胴体を蹴つ飛ばし自分の教室に足を向けた。

人形が正に蹴られてから音を立てて床に倒れて10分ほど放置されたあと、黒い影を人形を飲み込むように回収をしていった。

「起立、礼。着席」

「はい、よろしく〜」

正が教室へと向かうと、まったく面識のないやつが教壇に立っていた。そいつは金髪に金色の瞳のイケメンだった。問題があるとすれば正と背が同じぐらいなこと。

そいつは正のことを見かけると

「ふうん」

「ここに来てから何度も受けてきた侮蔑の視線を浴びせた。

「あの・・・」

「は～いよく聞いて！てわたしの愛しい生徒諸君」

「は～い、ラメロ先生～！」

ラメロの声に対してもクラスの生徒が声を合わせて答える。

「実はだね～、君たちにと～つても残念なお話があるのや～～！」

「と～つでも残念な話つて何ですか～？」

「なんと学園長先生がこの僕を戦闘訓練から外して、ビ・ニ・カ・の魔力のないようなやつに任せようとしているんだよ」

「え～！」

「君たちはそんな、ビ・ニ・カ・の魔力のないようなやつに教わりたいかい？」

「いやで～す」

「じゃあ、みんなでいおう！そんなやつは帰れってね！」

「帰れっ！帰れっ！帰れっ！」

まるで打ち合わせしたかのような田の前の出来事。それを呆然と見る正を見てラメロはフンと勝ち誇った笑みを浮かべた。

「・・・えー、終わりましたか？じゃあ、学園長先生から渡された資料に沿って授業を進めま～す、まずは教科書の・・・」

「ま、ま、待ちたまえ！君い！」

「何ですか？まだ何かあるんですか？」

慌てて正に詰め寄るラメロを面倒くさそうに正は見返した。

「さ、さっきのを聞いてなかつたわけではあるまい～」

「さっきの？あ～、何かギヤー、ギヤー言つてましたね。実はだね～あたりから聞いてませんでした」

「ほんと聞いてないじゃないかー！」

ラメ口は教壇に立つて指導の仕方、授業内容などの書類を見てい

卷之三

「うけたくありますーん！」

「じゃあもう一度こうんだー。」「こうんだー。」「うーん。」

「「帰れつ！帰れつ！帰れつ！帰れつ！帰れつ！」」

ラメ口の扇動により、また生徒たちが喚きたてる。その声の大き

さは教室を揺るがすほどだった。

「先生！」

レザーハンマーは、レザーハンマーの代名詞ともいえる「レザーハンマー」の文字が、斜めに左側に配置されています。

「い、これまたねー」

ナリ語葉方吹林が、なつてりまつた折りの先生を裏林に思ひ
ナド、まつまつと奥の裏室にまわつてまつた。

いや、先輩ぶち切れたら誰が止めるんだろう・・・。

「・・・・決闘で決めましょうか」

その言葉にクラスが静まつた。

「決闘？・・・・・つくははははははは！傑作だ！元の世界ではただの生徒でしかなかつた君が僕と決闘？くつはははははははは！」

決闘だつてよ！

馬鹿じやねえの！？

魔力もねえのに！

いかれてんじやねえのか！？

「決闘……つべつべ、いいけど、命をかけるつてことわかつてゐる？」

ラメロがここまで相手を嘲るのにはそれなりの自信があった。なぜならラメロは数少ない魔法剣の伝承一族であり、この学園で戦闘の指南をするほどのエキスパートである、それが魔力も無い、まだ10代のガキに負けるはずがない。

笑しか堪えきれないラメ口は、本来学園生活で使われることのない快闘場へと正を案内した。

あるだけだつた。

「がんばれーつ！ラメロ先生！」

たんば

「力のないやつなんかに負けるなー」

「メロはその轟をいつと

ハスロはその声をハニーモニした表情で置き入る

「聞こえるかい」の声が。この声が僕に力をくれる！勇気をくれる！・・・・・。ああ、はじめよいか・・・。そことそこに引いてある白線

まいすぐ並行に引いてある白線、その距離は大体10メートルほど。

「じゃあ俺はこっちで

—そこには僕だ！」

「……しゃあこ、かで」

•
•
•
•

一人が白線の後ろに立ち、足場を整えてから正が声をかけた。

「あ、そうそう、確認ですか？」

なんだい？

「殺してもいいんですね」

アーハツハツハツハ
できるものならね

二人が白線の後ろについた。

正の獲物は2メートルほどある方

【メ】は右手から、すい金色の光を帯びてゐる。

「ダメ」に頼まれてした生徒が開始の「図」を鳴らしながらした

• • •

ケリスリーのあとにてかし男が現れた

んなてかくなしやし！……いやなくて先輩！何を危なし

どうしてなんですか！」

なんた樋か 決闘たよ

決闘！？相手は・・・・・

桶は正と反対側にいる矢口を見ていた。

二の波が一帯の砾石砂丘（アリス）に打撃する。

「あ、これは、嫌がるまいが……？」

「ああ……まあついでにさう」カバー

「ハーレムつておまえ・・・・・」

「そりはさせねつす！そこの…………えーと…………変金髪！俺と勝負

だ!
」

いきなりの乱入、そして自分が決闘をやつ宣言。まわりの生徒は
いまいち意味がわからず、取り残されていた。

「へ、へ、へ、変金髪！？」母上にいつも誉められていた一点の曇り

長い長い木の棒を持つた。

「本気で殺りますよお~」

一
梶が一タニタしながら答えたとき、すでに付近には正はいなかつ

「ぶつ殺す」

魔法で出来たゴーレム。炎の渦。水流。氷のつぶて。雷のような一閃。風の刃。

そんなもののこの嵐が消し飛ばした。

見えるのは風。
当たるのは災害。

遠くから見ると、それは一つの和風のよつだつた

「なんだよこれ」

「ガガ

違
う。

「ひいいいいいいい」
あれは棒の残像。

— たすけ 。

鞭の残像

一九四九年二月一日記

梶の手から先で紡がれたのは棒でもなく、鞭でもなく、風だった。

悲鳴が台風の中で木霊する。だが、それすらも搔き消す嵐。

とには飛はれてせ風（櫛）はよ：てまた飛はれてまた巻き込ま
れ。

声が止んだとき、まわりの風（棒）が消え、梶の姿が現れた。

残っているのは倒れた木（生徒）と、ただの水溜り（血だまり）だけだった。

「貴様！何をしたかわかつてているのか！？」

ミフアエル学園長が棍の前の机を叩く。

「決闘はいいんじやないんすか？」

「ああ！決闘はな！だがあれは違う！・リンチか虐殺だ！」

「だからリンチ」

「ふざけるなっ！貴様は無傷で向こうは一クラス担任丸々重症、虐殺だ！」

「殺してないんだからいいじゃないっすか？」

「小僧ぶち殺すぞ？」

ぐいっと棍の胸倉を掴む。

「先生！、いくら魔法の能力が高くてもの距離ならぶち殺しますよ！」

その声にミフアエルはぞっとして目をそらした。

ミフアエルはそれなりに戦いを経験したことはある。ゴブリン退治やオーク軍の追い払い、大捕り物とした大人数でのドラゴン退治。数々の戦いをしたはずだ。こんな小僧に・・・心でいくら叱咤しても目が合わせられなかつた。

これが初日にヘラヘラしていた男の目か？同一人物なのか！？
目を見ればその人がわかる。これはある程度は正しいといえることだ。だが目の前の男の瞳の中などのぞきたくなど絶対になかつた。

「せんせ、もういいすか？正直少し疲れたんですね」

「あ・・・ああ」

ミフアエルはそのまま棍が部屋の扉を閉めるまで見送り、その後、魔法器具を使い異世界へと連絡を取つた。

次の日、ミロ・レ・ミフアエル学園長はその日、朝から学園長室で頭を書類に埋め悩んでいた。

あの後、異世界に連絡をとり調べたが・・・あいつが3番？あのレベルですか？

頭の中に昨日の惨劇が流れる。

「ああっ！」

思い出したものを消そうと頭を振ると書類がいくつか落ちた。だが、それでもミファエルの頭にこびりついたあのおぞましく深く黒い瞳は消えなかつた・・・。

そもそも奴らの戦闘のレベルはなんだ？普通、いくらいわれたからといつても馬鹿正直に1番、2番、3番。世界の切り札ともいえるやつら生贊にされるかもしないとこに差し出すか？

「なにか・・・なにか別の目的が・・・」

結局、その日ミファエルは学園長室に籠りきりだった。
ことが起るまでは・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2731d/>

world

2010年10月10日19時35分発行